

# 横田英史の 書籍紹介コーナー



## The Nvidia Way エヌビディアの流儀

テイ・キム、千葉敏生・訳  
ダイヤモンド社 2,640円(税込)

AIブームに乗って時価総額世界一にまで上り詰めた米エヌビディアについて、創業以前からの歴史と経営戦略、開発体制などを追ったビジネス書。共同創業者であるCEOのジェンソン・ファンなど、エヌビディア関係者への取材に基づいて内情を紹介する。

エヌビディアの社風は、週末のフルタイム労働や長時間残業、「光の速さで働け」などモーレツである。ジェンソンCEOは、「廃業30日前」と社員の危機感を煽り、公開の場での叱責で社員を鼓舞する。組織はフラットで、3チームが並行して製品開発を進める。

筆者が紹介するエヌビディアの評価は「勝てば官軍」。30年にわたってCEOの地位にあるジェンソンを手放して持ち上げる。本書を読んで強く感じるのは、「単一障害点」となっているジェンソンの存在だ。ジェンソン退任後のエヌビディアの先行きには不透明感が漂う。

## シンギュラリティはより近く ～人類がAIと融合するとき～

レイ・カーツワイル、高橋則明・訳  
NHK出版 2,640円(税込)

AIやバイオテクノロジー、ナノテクノロジーといった技術が切り開く未来を楽観的に語った「予言の書」。歴史を踏まえな

がら技術の進歩を振り返るとともに、数十年先までの未来を見通す。著者のレイ・カーツワイルは、前著(2005年刊)で「シンギュラリティは近い」と語ったことで知られる未来学者である。その楽観的な考え方は本書でも引き継がれ、シンギュラリティの実現は2035年頃を予想する。

「情報技術は、人間の可能性を実現する偉大な力と、社会が直面する多くの問題をまとめて解決する偉大な力を与えてくれる」「民主主義の理想の姿をより一層理解できるようになり、生活は指数関数的に向上する。貧困は減少し、収入は増え、寿命は延長する」と楽観論を説く。AIなど先進技術の脅威についても論じるが、全体の10%ほどのページで迫力に欠ける。

## NEXUS 情報の人類史(上)、(下)

ユヴァル・ノア・ハラリ、柴田裕之・訳  
河出書房新社 2,200円(税込)

「サピエンス全史」「ホモ・デウス」で知られる筆者の新作。今回は人類史における組織・情報ネットワークとAIに焦点を当てる。「サピエンス全史」で発揮された筆者らしい俯瞰的な視点は本書でも冴え、大きな枠組みの中で情報ネットワークとAIを捉える。

上下2巻で600ページを超える大著で、上巻ではITC以前の情報ネットワークをカバーする。情報とは何かに始まり、物語の重要性、印刷の発明、出版と科学の発展や魔女狩りとの関係、エコーチェンバー現象の発生、文書検索の必要性

と官僚制の誕生などに言及する。

下巻では、「AIの危険性と規制の必要性」を訴える。AIを警戒心なく受け入れ、政治・経済・社会のシステムに取り込むことに警鐘を鳴らす。AIは人間とは違う異質の知能であり、Ailean Intelligenceだと考えるべきだとする。「鉄のカーテン」ではなく、AIによって世界が分断される「シリコンのカーテン」を危惧する。

## 論理的思考とは何か

渡邊雅子  
岩波書店 1,012円(税込)

論理的思考の本質について、具体例を挙げながら解説した書。論理的思考のパターンは一樣ではなく、思考の対象となる分野によって異なることを明らかにする。筆者は2つのことを強調する。一つは多様性で、「論理的思考が世界共通で普遍」と考えるは間違いだということ。もう一つは、論理的思考には目的(領域)に紐付いた「型」が存在すること。領域を特定して、その領域にあった思考法を選ぶことが重要となる。

社会を構成する4領域(経済、政治、技術、社会)について、それぞれの領域における特徴的なレトリック(作文)を分析することで、思考法の違いを明らかにする。例えば経済ではアメリカのエッセイを例に、効率性と確実な目的達成を重視する思考法を示す。政治ではフランスのディセルタシオンを取り上げ、矛盾の解決と公共の福祉を重視することについて論じる。

横田 英史 (yokota@et-lab.biz)

1956年大阪生まれ。1980年京都大学工学部電気工学科卒。1982年京都大学工学研究科修了。川崎重工業技術開発本部でのエンジニア経験を経て、1986年日経マグロヒル(現日経BP社)に入社。日経エレクトロニクス記者、同副編集長、BizIT(現日経クロステック)編集長を経て、2001年11月日経コンピュータ編集長に就任。2003年3月発行人を兼務。2004年11月、日経バイト発行人兼編集長。その後、日経BP社執行役員を経て、2013年1月、日経BPコンサルティング取締役、2016年日経BPソリューションズ代表取締役就任。2018年3月退任。2018年4月から日経BP社に戻り、日経BP総合研究所 グリーンテックラボ 主席研究員、2018年10月退社。2018年11月ETラボ代表、2019年6月当協会理事、2020年4月(株)DXパートナーズ アドバイザリーパートナー、2024年3月(株)観瀾舎を設立 代表取締役社長、現在に至る。

記者時代の専門分野は、コンピュータ・アーキテクチャ、コンピュータ・ハードウェア、OS、ハードディスク装置、組込み制御、知的財産権、環境問題など。

\*本書評の内容は横田個人の意見であり、所属する団体の見解とは関係がありません。

